

# 二期成り性ラズベリー ‘ヒンボートップ’ における定植時期及び電照が 収穫期間に与える影響

高橋秀昌・多田史人\*

(山形県最上総合支庁産業経済部農業技術普及課産地研究室・\*山形県農業総合研究センター園芸試験場)

Effect of Planting Time and Lighting on Harvest Period in Primocane-fruiting Red Raspberry  
‘Himbo Top’

Hideaki TAKAHASHI and Fumito TADA\*

(Yamagata Mogami Agricultural Technique Improvement Research Office ・

\*Horticultural Experiment Station of Yamagata Integrated Agricultural Research Center)

## 1 はじめに

ラズベリーはバラ科キイチゴ属の低木で、寒冷地での栽培に適し、山形県最上地域のような豪雪・低日照条件下でも栽培可能な品目であり、定植当年から結実することなどから、新規導入する品目として有望である。また、ラズベリーの国内の需要は15年前の約10倍に増加しており、今後も安定的な需要が見込まれる。しかし現在は、需要のほとんどが輸入品でまかなわれている一方、国内ではほとんど産地形成されていない状況にある。こうした状況を背景にして、ラズベリーの新たな産地化に向けた栽培技術の確立を図る必要がある。

産地化にあたり、当地域では二期成り性品種 ‘ヒンボートップ’ を選定し、8月中旬から11月の降雪時まで結実する秋果のみを収穫する栽培体系を勧めているが、収穫のピークが9月上中旬に集中し、稲の収穫との重なりもあり、普及の妨げとなっている。そこで、収穫労力を分散させるために収穫期間をコントロールする技術が求められている。

ここでは、基礎的な知見として、定植時期や電照による長日処理が秋果の収穫期間に与える影響について検討を行った。

## 2 試験方法

### (1) 試験1：定植時期が生育及び秋果収量に与える影響

#### 1) 試験区

定植時期別に5月区、6月区、7月区、8月区、9月区の計5区を設け、各月20日頃に定植した。1区あたり3株定植し、2反復とした。

#### 2) 耕種概要

区の設定に従い、購入苗を株間1mで定植した。吸枝の発生幅を40cmとし、それ以外は防草シートで被覆し吸枝の発生を制限した。収穫期間中は雨よけを行った。

#### 3) 調査方法

定植後の吸枝長を経時的に計測し、株ごとに8月24日から11月20日まで2、3日おきに収穫を行い、秋果収量を調査した。

### (2) 試験2：長日処理が生育及び秋果収穫期間に与える影響

#### 1) 試験区

電照期間別に長日4週間区、長日8週間区、対照区の計3区設けた。1区あたり4株供試した。

#### 2) 耕種概要

5月11日に250ポットに鉢上げした2年生の株を6月20日まで露地条件で管理し、6月21日(夏至)から16時間日長(明期4~20時)で管理した。電照には屋外用150w型レフ電球を使用し、供試樹南前方3m、高さ1.5mと3.0mの2か所に設置して照射した。吸枝は1ポットあたり1本とし、それ以外に発生した吸枝は適宜切除した。収穫期間中は雨よけを行った。

#### 3) 調査方法

伸長停止後の吸枝長を計測した。また株ごとに、8月9日から11月20日まで2、3日おきに収穫を行い、秋果収量を調査した。

## 3 試験結果及び考察

### (1) 試験1：定植時期が生育及び秋果収量に与える影響

定植した株の落葉期の樹高は、5月、6月、7月区はほぼ同等で150cm程度であった。8月区は6本中5本が枯死し、残った1本がわずかに伸長し、9月区は定植時以降ほとんど伸びがみられなかった(図1)。また、5月、6月、7月区では時期によらず、それぞれ吸枝の伸長が停止する少し前に開花が始まった(図1)。

総収量は定植が早いほど多かった(図2)。7月区では11月上旬からようやく収穫が始まり、ピークを迎える前に降雪により収穫終了となった(図3)が、加温による施設栽培であれば冬季まで収穫が可能であることが示唆された。

### (2) 試験2：長日処理が生育及び秋果収穫期間に与える影響

吸枝長や副梢の発生本数、総副梢長は電照各区で対照区に比べ大きい傾向がみられた(表1)。時期別収量は8月と9月は電照区でやや多い傾向であったが、10月以降は各区とも差がみられなかった。また、収穫開始時期や収穫のピークは

各区ともほぼ同様に経過し、長日処理が収穫期間に与える影響はみられなかった(図4)。

#### 4 まとめ

二期成り性ラズベリー‘ヒンボートップ’は定植時期により秋果収量や収穫期間に差がみられ、定植が早いほど収量は多くなり、8月以降の定植では当年中に収穫に至らなかった。露地栽培において当年中に秋果収量を確保するには雪解け後の5月定植が望ましいと考えられた。さらに加温栽培により

収穫ピークの目標を冬季にしたい場合には、定植を遅らせることが有効であることが示唆された。また、5月、6月、7月区では、開花期は各区とも共通して吸枝の伸長が停止する少し前にみられたことから、花芽形成には吸枝がある程度伸張し充実する必要があると考えられた。

長日処理により秋果の収穫期をコントロールすることは難しいと考えられた。

以上から、定植2年目以降の株において秋果の収穫期を遅らせるためには、吸枝の栄養成長を長期化する必要があると考えられるが、今後さらなる検討が必要である。

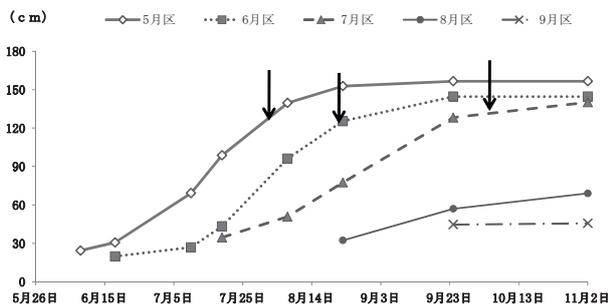


図1 吸枝長の推移 (試験1)  
※矢印は開花始期を示す

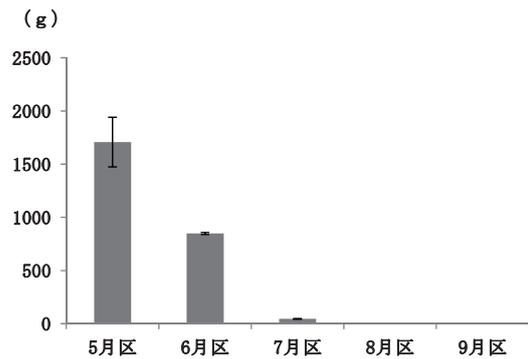


図2 吸枝あたり秋果総収量 (試験1)

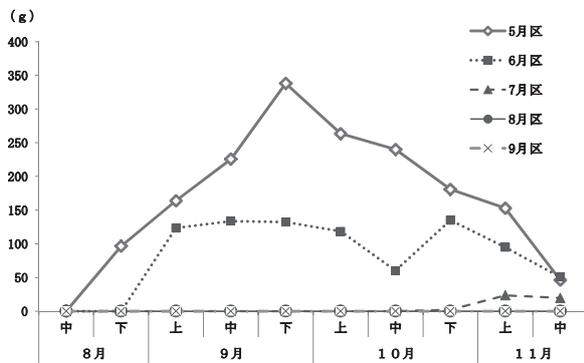


図3 吸枝あたり秋果収量の旬別推移 (試験1)

表1 生育及び着生花房数 (試験2)

区	樹高 (cm)	副梢本数 (本)	総副梢長 (cm)	花房数 (個)	
				総数	未収穫
長日 4 W	181.8	7.3	428.0	75.0	12.8
長日 8 W	170.0	7.5	447.8	81.5	16.8
対照	155.0	6.5	328.5	72.5	9.8

調査日：12月19日

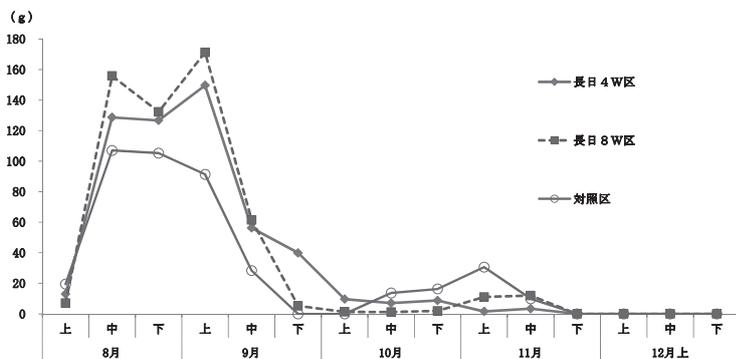


図4 吸枝あたりの秋果収量の旬別推移 (試験2)